中国現代都市家族の双系化傾向：CFPS -2016 による分析

○李雯雯（立命館大学・院）、筒井淳也（立命館大学）

欧米の近代家族理論によると、雇用労働の浸透や女性の社会経済的地位の上昇により、「夫方」「妻方」双方との双系的親族関係が父系に偏った単系的親族関係にとって変わりつつあるという。日本では 1960 年代前後に、家族制度が直系家族制から夫婦家族制への転換し、それに応じて親族関係が父系的なものから双系的ものに変化したという主張があった（森岡［1983］2000）。中国においても改革開放（1978）後の家族変動を主な研究対象にして、こういった双系化傾向が指摘されている（王躍生 2011、徐安琪 2001）。

資産相続は法的に規定されることがほとんどである現代社会において双系化を論じる場合、焦点は成人子間の居住と援助・情緒関係になる。中国の成人子間居住については、2010 年の第 6 回人口センサスによると、農村部では過半数の高齢者（65 歳以上）が成人子と同居している一方、都市部では同居率が初めて 50%を割り、同居率は都市部と農村部の両方において下がる傾向にある（王躍生 2014）。高齢者の生活保障に関しては、都市部では年金制度が比較的に機能しており、農村部では 2009 年の「新農保」が実施されて以来、社会負担が家族負担に対するクラウディングアウト効果が見られ、予測では 2022 年を転換点に社会負担が家族負担を上回る（穆懐中・陳曦 2015）。日常生活においては、全体的に緊密な世代間相互支援が確認されている（唐燦 2009、崔輝・靳小怡 2015、Guo2012、馬春華 2016、郝静 2017）。近年では、妻方親による育児支援の活発化、老親扶養における娘の重要さなどが指摘され、個別調査では双系化傾向が確認されつつある（唐燦 2009、沈奕斐 2010）。

ただ以上の指摘は、居住関係を除けば比較的断片的な証拠に基づいたものであり、体系的かつ詳細は社会調査データを用いた知見ではなかった。そこで本研究では、中国家庭追跡調査 CFPS(China Family Panel Studies)の 2016 年の個票データを用いて、中国現代都市家族の世代間関係の実態について、特に双系化傾向について考察する。分析では、都市部に在住する夫婦を対象にし、夫婦の両方とも父あるいは母が生存しているケースが対象となる。分析内容は、「居住関係」「親との関係良好度」「親への家事・ケア支援」「親からの家事・育児支援」「親と会う頻度」「親との連絡頻度」で、CFPS は夫婦両方の情報を含むため、これらにおける夫婦間の差をみる。その結果、以下のような知見が得られた：

① 関係の種類ごとに成人子とその親との関係、特に夫方・妻方への偏り方が異なる。
② 関係良好度は夫婦間で差がなく、居住・支援関係・会う頻度は夫方に、連絡頻度は妻方に偏っている。

ここから、中国都市部の家族において成人子関係は、ほとんどの関係のあり方において明確に「夫方」に偏っていることがわかった。他方で、連絡頻度は妻方に偏っており、施利平（2012）が日本の戦後家族について指摘したのと類似した特徴も指摘できる。

報告では、こういった父系（夫方）偏重と部分的な双系的特性という複雑な家族行動について、中国の家族を取り巻く構造的・制度的問題の観点から解釈する。中国都市部の成人子関係は、伝統的な家族規範意識によって成立しているというよりも、そういった規範から自由でありつつ、年金・医療などの各種福祉制度の不備に影響されている。また、「一人っ子政策」世代の多くが子育て期にある現在、人口学的な要因も影響しているはずである。

キーワード：中国都市家族、世代間関係、双系化